

STAGE

AMUSEMENT SQUARE

2月8日〜11日の4日間公演

「よいよ」満席迫る！ 会場 ダンスバレエ・リセ

ソロ・シアター3本立て！ バトルの誘惑！！

△豊島 重之（演出家・八戸在）▽

先日、スペース・ベンで上演された平霞（たいよし）健悦の演劇「フンころがし、ころがされる」は、人気TVドラマ「ドク」の設定を大胆に改変した久々のヒットであった。「アンパンマン五十音盤」という幼児向けガジェットを用いてユキがドクに日本語を教えこむ光景は、さながら拷問の様相を呈する。「ワタシハユキデス。アナタノナマエハナンデスカ」とか、割り箸を示して「コレハナンボンデスカ」とか、終始ユキは指を苛だたく動かし、五十音をうちだすが、肉声は最後までひとことも発しない。ヴォイス・チェンジャー付き防塵マスクをかぶらされたドクは、オンだけを嚙呑みに「ソレハイッボンデス。ソレハニホンデス」とか日本語のニュアンスを欠いたまま復唱していく。一本の割り箸を二本に割って使うという単純な事実が、ここでは「日本は一本なのか二本なのか」という座視できないコノテーションを突きつけてくる。ふと、高度の認知機能をもちながら口蓋の未発達（過発達？）のために発語には到らない（発語の段階を超越してしまっただけ？）サルの実験が思いつく。このユキとドク

はまるで二匹のサルではないか。それも飛行機スキヤンダルの猿石など及びもつかないほど岩石の真黙（かまくら）を強いられた猿。そしてここは密航船の糞尿まみれの暗い船底にちがいない。その証拠に、客席の頭上をズンと貫いて船底へと達する一本のタクトから次々と供給されるのは何百個もの卵の涎（た）れ流しなのだ。「食と性と蕩尽のコロニアリズム」などと野暮なことは言うまい。ドクがどこぞの難民ならユキは蛇頭（じゃとう）がらみの教師くずれでいい。ユキが口を開かないのは日本語が通じないからではなく、あくまで異語を言わせないための、つまりは極度に異語を怖れることではなかったか。演劇の「聴かない耳」はこうしたディテールにも見出すことができる。

日本語教育にひそむ「難民と拷問」というまさにリアルタイムの主題を、平霞はそれだけをなんの伏線も躊躇もなく「投げつけるように」舞台化した。転がす者はいずれ転がされるといふ処世訓じみた物語性はここにはない。転がす者も転がされる者も最初か

ら転がされており、そして最後まで転がされたままであるという「荒涼たる現在地」のむきだし提出。このことの意味は大きい。いまだに演劇をつくる側もみる側もつい伏線なり脈絡なり枠組なりをほしがらるからである。しかしその多くは「微温的な領きあい」以上のものではない。双方が安手の自己了解に走っているうちは、日本語教育そのものの異様に気づくことなく、たとえばルーズソックスから「難民と拷問」の現在進行形をとり逃がすだけだろう。英語のルーズソックスで通ってしまっただけ日本語教育はルーズなのだ、そのルーズソックスこそ学校社会に人知れずはびこる静かな拷問と、それに耐えるための救いがたい弛緩と、耐えられないがゆえの難民化現象を物語っているはずだ。ファクション

としてよく言われるその画一化した弛緩ぶりは、拷問が（する者もされる者もそれとは自覚できぬまでに）裾野の裾まで画一化したためにほかならない。いわば、表皮には一見なんの損傷も見受けられないのに深部組織は着実に修復しがたい壊死（えし）に見舞われている「低温熱傷」の事態。これを単に現在や現実のメタファと捉える限り、演劇はこの事態に手をうつことも手をこまねていることもできず、ただその傍らに「話さない口」として端座させられるだけだろう。ならばこの事態をモノの（刻々に変化する熱力学的な）諸相と捉え返して、その刻々のただ中に「話さない口」を分け入らせてみてはどうか。今回のリセ40周年企画「ソロ・シアター3人展」の狙いもそこにある。



安達良春作品より 安達良春

安達良春の作・演出・出演の一人三役『ゴビー』初演は、密室の少年が実験オタクに明け暮れるという明快な設定だけに子供から大人までバカウケの舞台だった。脳内神経系と身体動作を媒介するヘッドギアの「自己制御」実験。しかし常にわずかに制御過剰だったり制御不足だったりして悪戦苦闘の連続。そこにはオウム教

批判やベストセラー本「脳内革命」批判をみてとれるのだが、それ以上に安達独特のナーヴアスなナイヴさが奇妙な速度感と相乗効果をもたらしたからだと思う。ところが今回の改作「ラグ」にあたり安達は敢えて俳優に徹し、ウケ狙いを拒否しそうなあの「フンこ

ろがし」の平度健悦を演出に起用した。安達はバトルにうって出たのだ。ラグはズレとか遅れ、タイム・ラグのLAGだが、ほかに囚人という意味もあるらしい。そこに監視用ビデオカメラがどう関わるのか。これは力の入った一番になること請けあいである。

「線」



長尾広海作品より 宮崎睦子

長尾広海は、夜の底から触手のように伸びてくる無数の「線」の音色にじつと耳をそばだてるタイプの作・演出である。その音色を長尾の耳骨からじかに切りとってきて、そのネジ釘状の骨片を舞台上に突き立ててみせるのが主演の宮崎睦子だろう。電話とジグソーパズルを噛みあわせた前作『声の娼婦』も二人のコラボレーションの成果だが、今回、長尾はそれを全面改稿した。

「撮影劇 H0-59」

大久保一恵は知る人ぞ知る「たまたまのソリスト」である。昨春のオー

タイトルもそのものズバリ『線』でいくと言おう。おそらく声の侵入という電話のメディア性を重視した前作から電話器・電話線というマテリアル性に重心を移しつつ、その上、作者長尾から演出長尾へと戦術を本格化させて、女優宮崎との「耳骨をめぐる」新しいバトルに賭けたのではなからうか。とすれば返り血を浴びるのは誰か、われわれ観客のほうか。

ストラリア公演でも秋の八戸市公会堂での自作『ジュークパル』でも実証

ずみだ。今回、安達が用いるビデオカメラと似て非なるフォトカメラに大久保は挑戦する。この二つはどこが違うのか。それを一瞥（いちべつ）できるだけでも足を運ぶ価値があるとういものだ。撮影劇『H0-59』は、前作の現像劇『H0-58』の続編にあたる。H0（ホー）は、ベケット晩年の散文テキスト『ワーストワード・ホ

公開フォーラム「ダンスの口・演劇の耳をめぐる」

以上三人のソロ・シアターはそれぞれ微妙に異なる切実な問題提起をほらんでいる。観客一人一人が三つの上演をみて実感したこと充分だ、というのでは済まない微妙さと切実さがどうしても残る。そこで東京から三人のゲストを招いて、楽日の2月11日の終演後に観客を交えた公開フォーラム「ダンスの口・演劇の耳をめぐる」も開かれる。ダンスの「話さない口」は、そして演劇の「聴かない耳」は舞台上で一体何をしているのか。世界を旅する写真家としても知られる港千尋助教授は、講談社の新刊「記憶・創造と想起の力」の中でその手がかりを提出し

「最悪の方へ」に由来している。さらにアルトのテキストも加わる。言うまでもなく、写真の撮影それ自体がたぶん演劇的な行為である以上、さりげない仕草であればあるほどその演劇性は（文字通り、最悪の方へ）強化される以上、さらにそれを舞台にのせること自体、前作以上のバトルを強いられるのは必至であろう。

ているし（たとえば「写真の瞬間性とは、厳密にいえば、シャッターが閉じられる直前に最後の光子が到達した時点のことになる。」……）、演劇批評・写真批評の八角（やすみ）聡仁氏には例によって適確な示唆が期待できるだろうし、27歳で戯曲集『反論の熱帯雨林』を出版したばかりの可能涼介氏の口からは思いがけない異音（いおん）が奏でられるかもしれない。ちなみに当日受付で紹介される「ユリイカ」96年12月号には、可能・八角・豊島による読み応えのあるアルト論が掲載されている。まず、「ソロ・シアター3人展」を見のがす手はあるまい。

●「ラグ」
作／安達良春
演出／平霞健悦
出演／安達良春

●「線」
作・演出／長尾広海
出演／宮崎睦子

●「撮影劇 H0-59」
演出／豊島重之
出演／大久保一恵

■日時／
8日（土）午後4時～
9日（日）午後4時～
10日（月）午後7時30分～
11日（火）午後2時30分～

■料金／一日券 2千円
電話予約での申し込みも可能（前売券・当日券は同一料金）。

●2月9日（終演後）
港千尋レクチュア

●2月11日
公開フォーラム「ダンスの口・演劇の耳をめぐる」
時間／午後5時～6時30分
（ドリンク付）
ゲスト／八角聡仁氏
可能涼介氏

※チケットの半券を提示して下さい。

■問い合わせ／
☎43-6102（長谷川直行）
■会場／ダンスパレエ・リセ
☎45-9247（高沢）

2月の FANS

※いずれも午後7時30分、入場料500円

●七日「アラレティアの楽譜」
作・演出／大友寿宜

●十四日「タイトル未定」
作・演出／小屋敷暁
出演／小屋敷暁、高橋一真、堺健太郎

●二十一日「蟻」
作／L
出演／田中勉

●二十八日「芸能田中組『ごぶさた』公演」
出演／田中勉、他

〈問い合わせ〉
〒031 八戸市柏崎1-11-8
TEL&FAX 43-9876

□中里病院
□西町書店
→至三日町
■SPACE BEN
↓至プラザホテル

45号線
NTT

車での会場はご遠慮ください（近くに西町書店駐車場有）